

東日本大震災支援(平成 23 年 3 月 11 日～13 日)

長岡赤十字病院 救命救急センター 江部 克也

～～～過酷なミッションだったが、このメンバーとなら、また行ける～～～

長岡赤十字病院は震災発生当日に DMAT を出動させ、福島県立医大附属病院に向かった。その後、日赤の救護班として活動することになったが、原発事故の発生により、福島での活動を打ち切らざるを得ず、その後宮城県に向かった。被ばくを避けるための判断ではあったが、被災地の方々に対する心苦しい気持ちが残った。

震災当日の出動は、DMAT として、発災約 2 時間後、救護第 1 班よりやや先行して出発しました。途中の道路事情もあり、夜中になってようやく参集拠点である福島県立医大に到着しました。

すでにかかなりの DMAT チームが集まっていますが、今回の震災では DMAT の需要は少なく、南相馬市から多発外傷患者の搬送を行っただけで、待機が続きました。

翌朝には日赤医療センター・みなと赤十字とともに DMAT 隊としての撤収手続きをとり、日赤救護班として活動することにしました。赤十字からの指示は、後続の名古屋赤十字救護班とともに、海岸沿いで宮城県境にある新地町に救護所を立ち上げる、というものでした。

新地町役場に到着してみると、周辺は比較的落ち着いていましたが、そこから約 1km 先の海岸までは見渡す限り泥と瓦礫の平原でした。

長岡赤十字救護班が指揮をとり、町長への到着報告、役場内の救護所設営などを行いました。周辺の避難所に約 1,500 人の避難者がいるとの情報があり、各救護班から医療チーム編成し、派遣しました。

最後のチームの出発間際に、町から内々に「原発がく爆発するかもしれません」と言われました。この時点では危険についての報道はなく、赤十字本社も情報をつかんでいませんでした。まもなく名古屋赤十字が到着するとの報告があり、先着隊の責務として情報収集が必要であったため、結局全チームを送り出してしまいました。しかし、その直後に「至急離脱」の指示が赤十字から入り愕然としました。

離脱を決定し、ちょうど到着した名古屋赤十字をすぐに避難させました。役場内の救護所を撤収し、本部要員として残した各赤十字のメンバーには、派遣チームが戻り次第すぐに出発できるよう車内で待機してもらいました。

しかし、巡回チームは連絡の暇がないほど忙しかったようで、連絡がとれないままに爆発は起きてしまいました。救護所に割り当てられた役場の部屋で、ひとりだけで連絡を待つのは、本当につらかったです。

情報が乏しい段階では、人員を分散させない、派遣する場合は定時連絡を入れさせる、などの配慮が必要でした。原発からは 30km 以上離れており、結果的には被ばくもありませんでしたが、「原爆のように爆死するんじゃないか」と思った隊員もいたことは、リーダーとして反省しています。

赤十字の公式見解では、自分たちだけ避難するのではなく、情報収集のため転進・・・でしたが、現場では当然そんな解釈はしません。こればかりは、他人まかせにはできず、救護班を代表して町長に撤収を伝えましたが、その時の表情を忘れることはできません。

整然と後始末をして、きちんとあいさつをして撤収したはずでしたが、現地では見捨てられ感が強く、現在、町と赤十字の関係は、あまり良好ではないそうです。

万一の被ばくを避けるために撤収の判断は必要でしたが、今でも悔しい気持ちはあります。他の隊員も、「またくるからね」と言ったまま撤収したことを、気に病むことがあるそうです。

なお、差し迫る状況の中、できるかぎりの退避を勧めましたが、すべての救護班は、それぞれの隊員がそろりまで現場に留まっています。安全面からは感心できませんが、心意気には感謝しています。

もうひとつの問題点は、とにかく早く現地に行こうとあせったあまり、生活用品の準備が不足していたことでした。

中越地震のことが頭にあり、周辺のコンビニで調達できるだろう・・・と考えていたのか、水とゼリー程度は積んでいましたが、菓子パンを1個食べただけで被災地に乗り込んでしまいました。

発災当夜は菓子パン1個と福島県立医大でいただいたおにぎり1個を食べただけでした。翌日は、夜に退避先の宮城県白石市役所でいただいたカップめんとおにぎり1個を食べただけで、朝昼は抜きでした。3日目の朝は持参のゼリーを1個程度で、昼は名古屋赤十字救護班から缶詰やレトルト食品をいただきました。

わずかにとった食事のほとんどは、他からの好意でいただいたものでした。

衣食住のうち「住」にも問題がありました。被災地に迷惑をかけないようにと、2日目の夜は、退避先の白石市役所の駐車場で車中泊でした。しかし、あまりに寒く、エンジンはかけっぱなしで暖をとりながら眠りました。乏しいガソリンを消費しているうえに、周辺には騒音と排気ガスをまきちらしたのです。

野宿できる装備とまではいかななくても、季節を考えると寝袋などの準備をしておけば、車中泊であってもエンジンは切ることができたかな、と反省しています。

肉体的にも精神的にもかなり過酷なミッションでしたが、DMAT 隊員として訓練されているメンバーであり、かなりのストレスにさらされながらの活動の中で、ある意味では和やかな雰囲気でも活動できました。得難いメンバーであったと思います。

このメンバーとなら、またいつでも行ける・・・ただし、もう少し周到な準備が必要、というのが結論です。